

投稿論文

「ロッチデール」の半世紀 ～ 現代協同組合運動の原則と事業、その最初の 50 年を振り返る*

杉本 貴志 (関西大学 商学部 教授)

はじめに

「毛織物の工場生産の一大中心地」であるとともに「綿織物生産における世界の中心」にもなりつつあったロッチデール (Rochdale)¹ の街において、数十名の人々はその年の夏から話し合ってきた計画の最初の一步として、ほんの数種類の商品を並べただけの小さな店を開いたのは、年末の土曜日、1844 年 12 月 21 日のことである²。多くの住民たちから好奇の目を集め、商店主たちからは警戒されたというこの店は、開店してまもなく、品揃えのあまりのみすぼらしさから街中の失笑を買ったと伝えられる³。当初は開店時間も週に 2 日、月曜夜の 2 時間と土曜夕方からの 5 時間のみという有様だったが、このささやかに過ぎる「ロッチデール公正先駆者組合 (Rochdale Equitable Pioneers' Society⁴)」の店こそが、今日では 10 億人を集めて世界に展開する現代協同組合運動の源とされる【図 1】。

本稿は、これまで注目されることがなかった史料を含めて同時代の史料をあらためて渉猟し、この公正先駆者組合がいかなる状況の下で自らが進めた画期的な協同組合店舗の運営を世に広めることができたのかを明らかにして、先駆者組合の先駆者たる所以を問い直そうという試みである。



【図 1】 公正先駆者組合 1 号店跡 (現・ロッチデール先駆者博物館)

かつて栄えたトード・レーンが都市開発でこの一角のみが保存されている。写真は 2012 国際協同組合年のバリアフリー化工事。

1 協同組合の創始

労働者、消費者といった身分でくくられる“普通の人々”が自分たちの資力をもとに自分たちで運営し、利用する店を協同組合店舗あるいは生活協同組合というならば、この1844年生まれの公正先駆者組合はもちろん“史上最初の生協”ではない。英国でいえば、1761年に創立され、海外移民による人口減少の影響で1873年に閉鎖されるまで1世紀以上存続したスコットランドのフェンウィック (Fenwick) の織物工組合による購買事業 (1769年創始⁵⁾) が最初の生協扱いされることが多く⁶⁾、イングランドでも、シアネス (Sheerness) で港湾労働者が1816年に組合を結成したと伝えられているし⁷⁾、オウエン (Robert Owen) に感化され、キング (William King) に学んだ初期協同組合運動によって1820年代後半から1830年代前半に250以上の協同組合店舗がつくられている⁸⁾。

この時期にできた協同組合店舗は、大部分が1840年代までに消滅したけれども、ロックハースト・レーン (Lockhurst Lane 1832年創設)⁹⁾ やリップonden (Ripponden 1832年創設)¹⁰⁾ の組合は、公正先駆者組合創立の1844年時点でもまだ続いていただどころか、20世紀になっても長く存続している【図2】【図3】。



【図2】 ロックハースト・レーン協同組合 創立100年記念紅茶缶
ロッヂデールよりも10年以上早く、第2次大戦前に100周年を祝った。



【図3】 Halifax Evening Courier, 20 May 2010
リップondenこそコープの元祖で、女性を組合員として認めるという点でもロッヂデールに先行していたと主張する地元メディア。

そうした例外的存在があるにせよ、協同組合が過去の失敗として忘れられかけていた1840年代に、あえてロッチデールの人々は再び協同組合を立ち上げたというのが、われわれが従前より抱く理解、イメージである。しかし、当時の状況を見直してみると、そうした見解には一定の修正が必要ではないかと思われる。イングランド北部では1840年代に至っても新たな協同組合の設立が続けられており、1844年夏にロッチデールで先駆者たちが立ち上がったことを、周囲から孤立した唯一無比の動きとして捉えるのは適当ではない。その前年、1843年のハダスフィールド（Huddersfield）における協同組合をめぐるいざこざを伝える地元紙の記事からは、その思想的背景がどうであれ、協同組合という形式の店舗そのものは当時も決して過去の遺物とはいえない存在だったことが読み取れる¹¹。1820年代後半からのオウエン派初期協同組合運動全盛期ほどではないにせよ、北イングランドでは協同組合店舗をつくらうという人々の動きがあちらこちらでぼつぼつと、絶えることなく続いていた¹²。

やがてこれらの協同組合は、地域コミュニティに立脚して、住民の日常の消費・買い物の中心となる。イングランドの多くの市町村で、中心部にあるもっとも立派な建物は、協同組合が運営する百貨店などの店舗だった【図4】¹³。そしてそれは単なる買い物の場というだけでなく、知識や教養が得られる社交の場としての機能をも果たしていたのである¹⁴。協同組合は地域コミュニティの“核”だった。第2次大戦後の合併・統合の時代を経て、組織名こそ変わってはいるが、今日に至るまで、その後継組織が事業を続けている。ロッチデール公正先駆者組合も例外ではない。



【図4】街の中心部を占めるタムワース協同組合の百貨店型店舗
1886年創設の地域密着独立系協同組合だが、コロナ禍により建物は地域議会に売却され、2022年2月、百貨店としての機能を終えた。



2 ロッチデール方式の普及・拡大

つまりロッチデール公正先駆者組合が最古の生協だというのは事実には反する完全な誤解であるのだが、それにもかかわらず、やはり“協同組合運動の源流はロッチデールにあり”とわれわれが認めるのは、協同組合の原理・原則という次元で、言い換えれば他の模範・目標となるような影響力を発揮したという点で、この組合が突出した存在だったからである。

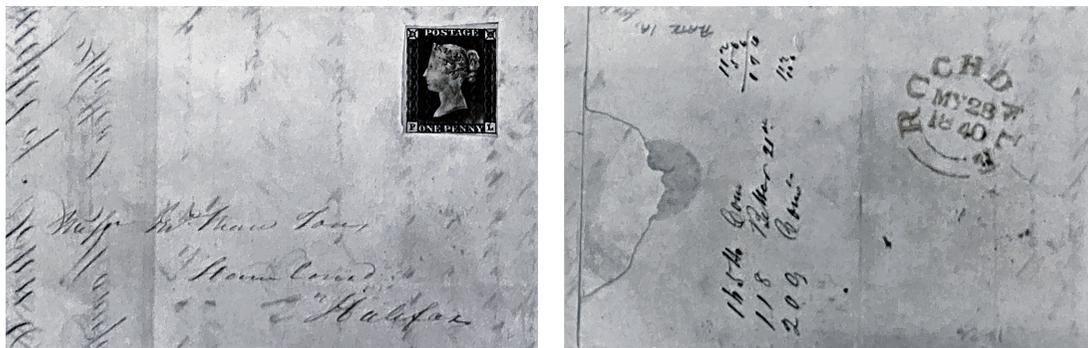
それ以前の協同組合はほとんどが短命であったし、リッポンデンの組合のようにたとえ長く存続していたとしても、協同組合としての理念の追求と購買組織としての経営手法の実践とを巧みに組み合わせ、後世がいうところの“ロッチデールの原則”を、自らが徹底するのみならず、それを他にも広めるといふ、公正先駆者組合のような“協同組合運動としての影響力”を持ち得なかった¹⁶。したがって1844年以前の協同組合やその店舗の運動は、協同組合陣営においてさえ、いつしか忘れられてしまうのである。

公正先駆者組合の誕生は、新しい歴史の始まりだった。運動は、羅針図と処方箋を得たのである。そうはいっても、その規模・勢力は1840年代には微々たるもので¹⁷、外部に大きな影響を及ぼすような存在ではなかったが¹⁸、1850年代になると状況は一変する。隣町オルダムで1850年に2つの生協が誕生したのは、明らかにロッチデール公正先駆者組合の影響である¹⁹。この年、その2年前に比べて4倍以上の組合員を抱えて大きく規模を拡大した公正先駆者組合は、店員の労働時間や給与を固定し、青果や精肉を恒常的に取り扱う店舗の新設を決議するなど事業と運営の体制を固めて²⁰、いよいよ協同組合運動を先導する役割を担い始める。年の初めには組合の創始とあゆみ、現在の状態を説明するレポートを印刷することが決められていた²¹。新たに発足した1ペニー郵便制度【図6】も活用して、ウィリアム・クーパーらは自分たちの店舗哲学をランカシャーやヨークシャーの町村に伝え、広めたという²²。前年のヨークシャーの地元紙には、公正先駆者組合の業績や利用高割戻し、現金販売などの特徴を紹介するとともに、切手を送ってもらえれば新たな定款や資料を郵便で送付すると呼びかける投稿が掲載されていたが²³、こうした広報活動の成果なのか、リトルバラ (Littleborough) やミルンローといった隣接集落で1850年中に協同組合が立ち上げられているし、大都市シェフィールド (Sheffield) からも組合創設を目論む人々がロッチデールを訪れて公正先駆者組合を見学し、大いに満足したと記録されている²⁴。

ロッチデールの店と人々は、まさに地域の協同組合運動の先駆的モデルとして役割を果たし始めていたのである。



【図5】 トッドモーデン協同組合の店舗跡
ロッチデールから列車で4駅ほど、ロッチデール運河も通るトッドモーデンに今も残る建物。看板はそのままに、現在は「むかしの生協 (Old Co-op)」という名のカフェとして使用。



【図6】 ロッチデール局 1840年5月28日引き受けのハリファックス宛郵便物

この年、前払いの低額均一料金で封書を届ける画期的制度が導入され、5月には世界初の郵便切手ペニーブラックが発行された。現代に直接つながる郵便制度の誕生である。1844年創立の先駆者組合はそれ以前の初期協同組合には得られなかった手段を存分に活用し、自分たちの運動を世に広めた。

この1850年には、法的な根拠は些か怪しかったが、他組合への卸売部も公正先駆者組合に設けられ、毎週月曜日の1時より卸売のために店を開けることが決められた²⁵。その理由のひとつは、隣町オルダムにつくられた協同組合の立ち上げ支援だったと推測されている²⁶。関連組織であるロッチデール協同製粉所(Rochdale Co-operative Corn Mill、1850年創立)も、公正先駆者組合のみならず、ベイカップ(Bacup)やパディヤム(Padiham)など近隣のさまざまな協同組合店舗に小麦粉を供給した²⁷。新設組合が最も苦勞するのは組合員に供給する良質な品物の確保であったから、こうした卸売は組合店舗の普及に大いに貢献したであろう。キリスト教社会主義者ラドロー(John Malcolm Forbes Ludlow)は、1851年夏にランカシャーやヨークシャーの協同組合を視察し、共同生産や卸売の状況を含めて、各町村に小規模店舗が展開して黎明期から揺籃期へと進みつつあった地域の状況を詳しく伝えている²⁸。

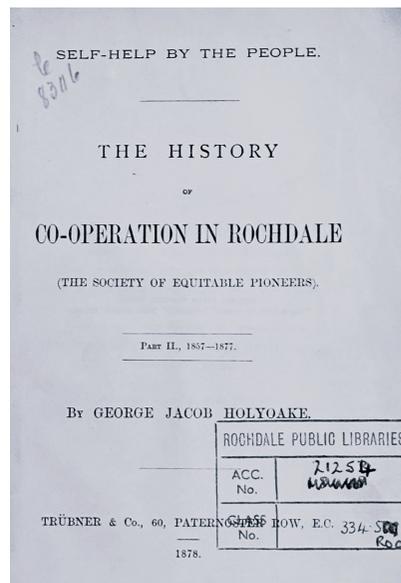
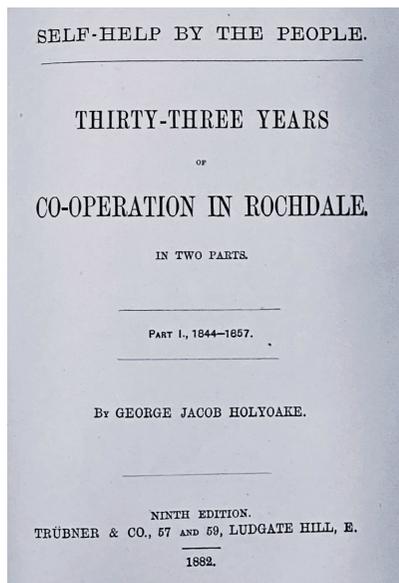
そして1852年、消費協同組合を立ち上げようとしても友愛組合法に依拠するしかなかった英国において「産業および節約組合法(Industrial and Provident Society Act)」が成立する。この法律は史上最初の協同組合立法とも評される²⁹。ただし、この1852年法では出資者の有限責任が規定されておらず、キリスト教社会主義者ニール(Edward Vansittart Neale)は、協同組合関係者が株式会社に対して反発や距離感を抱き、産業および節約組合法を好むのは当然だと認めながらも、あえてこの法律ではなく有限責任会社として協同組合をつくることを訴えた³⁰。しかしこの問題も1862年の法改正で有限責任制が導入されることで解消し、1862年法では複数の協同組合が連合組織を結成することも可能となった。それを受けて1863年に生まれたのが、卸売の連合会CWS(North of England Co-operative Wholesale Industrial and Provident Society Limited. のちにCo-operative Wholesale Society)である。こうして事業環境や法的地位において立ち上げと発展の基盤を確保した協同組合運動は、1860年代から70年代にかけて爆発的な広がりを見せることとなる。それにはメディアの力も大きかった。ジャーナリスト感覚に優れたホリヨークのような人物が公正先駆者組合に注目し、その運動の精神と経営の哲学を世に広めたのである。

「ロッチデール協同組合の先駆者たちの歴史」と題して『デイリー・ニュース』1857年7月6日付に掲載され³¹、その後も連載を予定していた彼のルポは、紙面の都合でその予定を

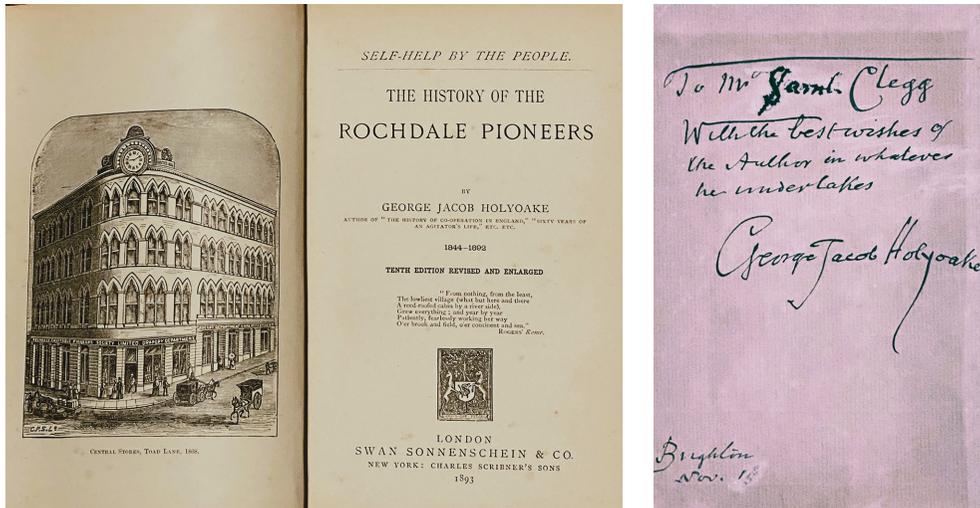
果たせず、翌年に単行書『民衆による自助：ロッチデールにおける協同の歴史』(*Self-help by the People. The History of Co-operation in Rochdale*, London, [1858]) としてまとめられ、版を重ねた。1878 年には 1857 年以降を取り上げた第 2 部 (*Self-help by the People. The History of Co-operation in Rochdale (the Society of Equitable Pioneers). Part II., 1857-1877*, London, 1878) も刊行され、タイトルを *Self-help by the People. Thirty-three Years of Co-operation in Rochdale in Two Parts. Part I., 1844-1857/ Part II., 1857-1877* と変えた版も出ている【図 7】。さらに組合創立 50 年の直前には、増補版 (第 10 版) が *Self-help by the People. The History of Rochdale Pioneers*, London, 1893 として刊行され、これもまた刷りを重ねてますます多くの関係者・市民・学生らに愛読されるのである【図 8】。

『民衆による自助』の影響がいかに大きかったか、先駆者のひとりクーパーが新聞への寄稿で語っている。彼は、産業および節約組合法で登記された組合が 500 以上あり、その半数以上の 332 組合を登記官が議会に報告していると述べた上で、次のようにいう。

1857 年に G・J・ホリヨークは『民衆による自助：ロッチデールにおける協同の歴史』と題する本を書いた。そして大英帝国のほとんどすべての町で、労働者の誰かがこの本を購入し、読んだのである。ロッチデールでは 500 ないし 600 部以上が販売されたが、それはロッチデール公正先駆者組合の組合員たちにとって、自分たちの物語を読むことは教養であるとともに楽しみでもあったからである。さらにこの本は、多くの新聞、雑誌その他に書評され、労働諸階級に協同組合が推奨されることで、この上なく価値ある成果をもたらした。登記官が報告する 332 の組合のうち 261 組合は 1857 年以降の設立なのである。いま自分たちの組合が成功しているのはこの物語を読んだことによるのだと幾人もの人々がいうのを、私は聞いている³²。



【図 7】『民衆による自助』第 1 部 (1882 年版) と第 2 部 (1878 年版)



【図8】『民衆による自助』増補版（1893年版）と表紙裏に記されたホリヨークの献辞

初期の版では、最終章で「協同組合が成功するための条件」が具体的に13条にまとめられて紹介されていた³³から、店舗設立の参考に本書を手にとった人々には有益だったろう。1864年の調査によれば、その前年にイングランドとウェールズで活動していた協同組合の設立年は【表1】のようになる³⁴。この数字からは、法律の制定以上にホリヨークの著述による衝撃が大きかったのではないかと推測される。また、その50年後の調査では、公正先駆者組合以前に創設された協同組合で世界大戦の時代まで生命力をもっていたランカシャー周辺の組合は10に満たないが、ロッチデールに学ぶことが出来た1850年代以降創設の組合では300以上が1913年時点でも存続していることが示されている【表2】。ロッチデール方式を採用することは、経営の安定をもたらす条件でもあったといえよう。

【表1】1863年時点で存続していた創立年別の協同組合数

創立年	組合数	創立年	組合数
1795	1	1852	1
1835	1	1853	5
1838	1	1854	11
1840	1	1855	9
1842	1	1856	12
1844	2	1857	10
1845	1	1858	17
1847	4	1859	37
1848	2	1860	98
1849	5	1861	152
1850	9	1862	68
1851	10	1863	2

Source: A. M. Carr Saunders et al. *Consumers' Co-operation in Great Britain: An Examination of the British Co-operative Movement*, 3rd. ed. London, 1940. p. 32.

【表 2】1912 年時点で存続していたランカシャー周辺の創立年別協同組合数

創立年	ランカシャー	チェシャー	ヨークシャー	計
1825-29	-	-	1	1
1830-34	-	1	2	3
1835-39	-	-	1	1
1840-44	1	-	2	3
1845-49	4	1	4	9
1850-54	17	-	5	22
1855-59	22	4	18	44
1860-64	45	11	44	100
1865-69	17	-	36	53
1870-74	19	3	26	48
1875-79	13	-	13	26
1880-84	8	2	7	17
	146	22	159	327

Source: G. D. H. Cole, *A Century of Co-operation*, London, 1944. Chap.9.

そして 1860 年代後半以降、その影響は西欧文化圏の外の世界にも及んでいく。

たとえばウクライナのニコライ・バーリン (Nicolas Ballin) は、ハリコフ (Kharkov ハルキウ) でロッチデール式の消費生協の設立に尽力し、1867 年初めにハリコフ消費協同組合の第 1 号店が開店している。彼は 1869 年にドイツやフランスなど西ヨーロッパの協同組合を訪問したが、「最も印象的で収穫の多いもの」は「現実的で分かりやすく、より共感もてる」ロッチデールなどイギリスの協同組合店舗だったとして、帰国後もその実践と啓蒙の活動に奮闘している³⁵。また、文明開化の意欲に燃えるかつてのサムライたちがロッチデールを訪れたのは 1870 年代初めで、やがてこの極東の島国にもロッチデール式店舗の運動が移植された³⁶。

英国内では CWS に結集した協同組合陣営が世界最大の流通業にまで成長し、ロッチデール式協同組合は自由競争経済の枠内でその体制に挑戦するほとんど唯一の現実的選択肢³⁷として、世紀末と新世紀を迎えることとなるのである。

3 ロッチデール・システムとは何か？

a なぜロッチデールなのか？

1844 年、ロッチデールの街で、公正先駆者組合は「地の利」と「時の利」という 2 つの好条件に偶然にも恵まれて誕生した。

いかに優れた運営が行われていたとしても、それが小さな島のなかの町であったり、山に囲まれたスコットランドの村落であったりすれば、町村から地域へ、地方から国へと時代を席卷するような影響力を発揮することはむずかしかったかもしれない。しかし産業革命の中心都市マンチェスターやリバプールからほど近く、18 世紀末にはランカシャーとヨークシャーを結び、通商の要となった幅広い運河 (Rochdale Canal) も整備されていたのがロッ

チデールである。二大都市マンチェスターとリーズをつなぐ鉄道の駅 (Rochdale Station) も 1839 年に建設され、ウールとコットン双方の繊維産業の拠点でもあったこの地で創建された組合は、人の交流や情報の発信という点で、ランカシャーやヨークシャー、そして英国全土に一大運動を展開させるための好条件を備えていたといえるだろう。

しかも G・D・H・コールが指摘するように、1836 年から始まった不況に苦しみ「飢餓の 40 年代」と呼ばれたイングランドの経済が、公正先駆者組合の誕生・揺籃期であった 1844 年から 46 年にかけてだけは一時的に景気が回復するという僥倖にも、この組合は恵まれている³⁸。そうでなければ、生まれただけの脆弱な、ほんの数十人の組合が生き延びることはむずかしかったかもしれない。その好況は一時的なもので、織物業の街ロッチデールも 1847 年には再び深刻な恐慌に襲われるが、そのあおりでロッチデール貯蓄銀行が倒産する。しかしこれによって公正先駆者組合は悪影響を受けるどころか、逆に資金の新たな逃避先として注目され、出資する組合員が急増するという思わぬ経験をするのである³⁹。こうして当時としては大規模な協同組合へと一気に成長した公正先駆者組合は「飢餓の 40 年代」を乗り切り、躍進の 1850 年代を迎えることができたのだった。

もちろんこうした偶然的な地の利、時の利を生かすことができる指導層とそれを支える組合員層という優れた人材に恵まれたのがロッチデール公正先駆者組合であって、そうした「人の利」こそ成功の最大の要因である。彼らは、この街に先行して設立された組合の失敗にも学びながら、それまでの協同組合運動が培ってきたさまざまな経験を取り入れ、それらを組み合わせ実践することができる人々であり、それに呼応して組合の事業を利用者として支えることが出来る人々だった⁴⁰。

そうした公正先駆者組合の営みは、彼ら自身によって、またそれを観察した人々によって、ロッチデールの“システム”“ルール”“原則”“方式”“実践”“行動”等々の語を用いて解釈・説明され、要約される。後発の協同組合がそれを学び、運営に取り入れることで、ロッチデール・システムはイングランド北部から英国全土、そして世界全体へと普及し、いつのまにか「ロッチデール原則」という表現が一般化するが、はたしてそれは本来どういうものだったのだろうか。

b 創立時の取り決め

ロッチデール方式とは何かを論じるにあたって、まず取り上げるべきは、1844 年の創設時に先駆者たちが合意した規約文書、通称「ロー・ファースト (Law First)」が記す公正先駆者組合の目的とその運営ルールであろう⁴¹。そのなかでは、「組合員の金銭的な利益を確保し、社会と家庭におけるその状況を改善する」ことを目的とし、各人が 1 ポンドずつ出資して、(1)「衣」と「食」を提供する店舗の開設、(2)「住」の確保、(3) 失業や賃下げに苦しむ組合員に雇用を提供する製造業の開始、(4) 同様の趣旨での農地確保と耕作、(5)「協同の利益を図る自立した国内入植地 (self-supporting home colony of united interests)」の建設や支援、(6) 禁酒ホテルの設置、を行うとされている。

1820 年代から 30 年代にかけて、ロンドン協同協会 (London Co-operative Society) やブライトンのキング博士によるイングランド南部を拠点とした協同体建設運動の考え方が『協同組合雑誌』(Co-operative Magazine) や『協同組合人』(Co-operator)、協同組合コングレ

ス (Co-operative Congress) などを通じて北部イングランドにも伝わり、その第一歩として、多数の店舗が立ち上げられた。公正先駆者組合も、まずは店舗で資金を蓄積し、次にそれを元手に住宅や生産事業に進み、段階的に生産と消費と生活と労働の協同コミュニティを建設していくという戦略をそのまま継承した計画を創立時には掲げていたのである。すくなくとも 1844 年夏の段階では、公正先駆者組合設立の企てはオウエン派協同体建設運動の一環として位置づけられる。先駆者たちの半数はオウエン主義者 (当時の用語で「社会主義者 (Socialists)」) であったし、これ以前の協同組合に参画していたメンバーもいたから、公正先駆者組合を初期協同組合の延長線上に描くことも可能であろう。

しかし、両者の間には大きな違いもある。売掛金の焦げ付きなど放漫な経営で挫折した前車の轍を踏まないように、公正先駆者組合は特定の人物による恣意的な運営を退け、規則や管理を厳密に定めて、些細な事であってもすべて話し合いで決定するという態度を常に徹底していたのである⁴²。その姿勢は、この創立文書でも示されている。

ともすれば目的と計画の部分のみが注目されがちであるが、この文書ではその後に 30 以上の細かな運営ルールが列挙されており、「ロッチデール原則の中心部分は、すでに開店前に形成されていた」と指摘されている⁴³。そこには「利用高に基づく剰余の割戻し」「出資に対する固定した利子」「現金販売」「純良な品質、正確な計量」「1 組合員 1 票の民主主義」といった原則が盛り込まれ、それに基づいた店舗運営が準備され、年末から実践されたのである。

この規約文書は 250 部が印刷され、2 ペンスで頒布されると決められた⁴⁴ から、ロッチデールの街で組合加入を考える人だけでなく、周辺で同様の店舗開設を目論む人々にとっても、大いに参考となる実践ガイドとなり得たであろう。

c システムの確立

しかし、創立時に掲げられた計画と、定められた規約とのあいだには、大きな矛盾、齟齬もあった。それは先駆者たちの多様な考え方と、オウエン派の衰退という時代の進展をあらわすものである。そもそも彼らにとって店舗とは、協同体建設の資金を蓄える手段でもあったはずなのに、剰余は出資に対する利子の支払いと利用高に応じた組合員への割戻しにあてると規約は定めている。これではいつまでたっても国内入植地の建設など出来ないだろう。こうして店舗の事業は、いつしか協同組合運動の目的そのものへと転化する。そしてそれに応じて、協同体建設の参画メンバー候補として草創期には 1 人ずつ厳格な加入審査を行っていた公正先駆者組合が、利用組合員を広く呼び込む開かれた協同組合へと変身するのである⁴⁵。

1850 年代、取扱品の拡大と支店の設置で利便性が向上し、より多くの人々が公正先駆者組合に惹きつけられ、組合員 3000 人以上という大規模生協が誕生した。地方の有力組合から全国の協同組合を象徴する存在へと発展した公正先駆者組合は、この後ホリヨークの著作の影響もあって、協同組合の世界だけでなく知識人や一般にも知られる存在へと進化するのであるが、この時代にあわせた定款への改正が 1854 年 10 月 23 日の組合員総会で決議された。新たな定款では第 2 条において、「この組合の目的は、組合員の自発的な出資による資金を貯めて、食料や燃料、衣料、その他の必需品の購入をよりよく達成できるような総合取引業を共同で営むことである」とされている⁴⁶。10 年前の創立時に謳われていたオウエン流派

の協同体建設は棚上げされ、現今の経済体制下、店舗を中心とした事業によって労働者の自立をめざす運動として、公正先駆者組合は自らを位置づけたのである。

広報に積極的であった先駆者たちは、運動の目的をアピールし、先駆者組合と関連組織の1年の成果をまとめた、カレンダー兼用の一枚物の暦（Almanac）を1854年以降毎年印刷して頒布しているが、1854年の組合暦には創立時の文書を抜粋して組合の目的が記されているのに対して、翌年以降の暦ではそうした記述が消えている。その代わりに、「この組合の目的は組合員の社会的、知的向上である」として、公正先駆者組合の他、ロッヂデール地区協同製粉組合、ロッヂデール協同製造会社、ロッヂデール公正儉約疾病埋葬組合、ロッヂデール協同土地建設会社といった関連協同組織の業績を紹介し、ロッヂデールの街の中で、生活のあらゆる側面から労働者の地位向上を図る協同組合組織の姿が描かれる。未来のユートピア村ではなく、現実の生活の中で役立つ事業体として、公正先駆者組合は自らの成果を世に誇ったのである。

こうしてロッヂデールは、地域で「協同」の運動に携わる人々の新たな道標となった。思想と理論で運動をリードしようとしたロンドンを拠点とするキリスト教社会主義者や法律家らとは異なり、それは実践を示すことによる導きである。イングランド北部では1850年代半ばから、初期協同組合運動の全盛期に匹敵し、あるいはそれを上回るかのような勢いで、協同組合店舗設立のブームが再来する。新規に組合を立ち上げようという人々だけでなく、公正先駆者組合創立以前につくられ、独自の道を歩んでいた組合の中にも、剰余の利用高割戻しを取り入れて「ロッヂデール式」に衣替えする組合が生まれている⁴⁷。

4 軋轢と混沌の世紀末

19世紀後半、先達の失敗に学んだロッヂデール公正先駆者組合は、成功した協同組合のあり方を初めて世間に示した。その運営哲学が、自らの手で、あるいはホリヨークら支援者によって、わかりやすく整理され、提示されることで、ロッヂデールを導きの糸とした協同組合運動が生まれ、展開される。ロッヂデールが協同組合運動において文字通り「先駆者」であるというのは、そうした意味での先駆者であって、彼らは新たな原則・運営を創案したという意味での先駆ではなかった。

たとえば「利用高割戻し」という独特の剰余金処分法は、協同組合にふさわしい利益の配分法であり、組合の利用を促すことでその事業発展にも資するものとして、1850年代以降あらゆる協同組合で採用された原則である【図9】。実践の世界でも、教育の世界でも、またメディアや映画においても、これは公正先駆者組合のハワース（Charles Howarth）の発案だという伝説が広まっている⁴⁸。しかし実際にはメルサム・ミルズの組合（Meltham Mills Provident Co-operative Trading Society）で、おそらくは1827年の創立直後から、この仕組みが採用されている⁴⁹。

これについて、先駆者100年を描くブラウンは、「メルサム・ミルズの集落ですでに17年前に割戻しという方法が試みられていたとはいえ、ロッヂデールの人々はその最初の実践者（the first practitioners）となった」と些か苦しい表現をしている⁵⁰。また同じく先駆者以来

の協同組合の1世紀をまとめたG・D・H・コールは、オウエン派のキャンベル (Alexander Campbell) による割戻しの提唱や、ウォーデン (Benjamin Warden) が指導した協同組合 (First Western Union Co-operative Society) による利用高割戻制の採用についても紹介した上で、「・・・1832年には利用高に基づく割戻しは新しい考え方とは見なされていなかった。私が言いたいのは、1844年までにこれが誰からもすっかり忘れられてしまって、チャールズ・ハワースがもう一度これを独自に編み出すというのにはありえないということである。」⁵¹ という。



【図9】 トークンとチェック

ロッチデール式協同組合では買い物金額に比例した組合員への割戻 (Divi) を行うために、買い物時に代金分の代用貨幣 (Token) や小切手 (Check) が渡され、割戻日にこれと引き換えに割戻金を受け取る仕組みが広く採用された。トークンは牛乳やパンの配達でも代用貨幣として使用された。先駆者組合のライバル、ロッチデール俚約協同組合のトークン。パン用トークン。牛乳用トークン。炭用の紙製チェック。

同様に、店舗の運動でありながらも教育を重視し、組合員のために図書室を設けたということについても、ハダスフィールドの組合に前例がある⁵²。ロッチデール公正先駆者組合が現代協同組合運動の先駆・源流に位置づけられるのは、個々の原則の創案者であったからではなく、さまざまな冒険や試行錯誤を重ねながらも経営的・運動的な成功にはなかなか至らなかった先行組合の歴史を踏まえた上で、その経験と教訓と遺産とを総合して新たな運営モデルをつくりあげ、協同組合店舗成功の鍵となるその原則を周辺のコミュニティに積極的に

伝えて広めたことによるのである。やがてそれは、経営的に苦戦していた救済組合や協同作業所など他のタイプの協同組合組織にも広まり、英国の協同組合運動を「ロッチデール式」一色に染め上げることとなる。そこから、すべての始原はロッチデールにありといった伝説も生まれるのである。

しかし、運動の拡大は必然的に解釈の多様化と論戦を生み出す。創立を担った先駆者たちが引退し、指導層が代替わりすれば、ときに混迷にあえぐこともあり得るだろう。1860年代、南北戦争時には綿花飢饉にもかかわらず奴隷解放支援を曲げずに貫いたと賞賛され⁵³、事業においても壮麗な中央店ビルの建設を誇った⁵⁴ 公正先駆者組合は、その後まもなく激しい批判に繰り返しさらされ、ついには組織の分裂をも経験する⁵⁵。

それは一組織の一時的な混乱にとどまらず、たとえば協同組合運動における卸売りと仕入れの問題、あるいは協同組合で働く労働者の位置づけという問題、そしてそもそも協同組合運動は何をめざすのかという根本的な問題を提起し、理念と事業について広く議論を呼び起こした。とくに協同組合労働の問題については、これをロッチデールの先駆者たちが重視した中心的命題と見なすのか、それとも協同組合はあくまで組合員の運動であり、ロッチデール流に割戻しを消費者に還元することがその最大の使命だと考えるのか、公正先駆者組合誕生50年の世紀末に向けて、議論が白熱する。それは消費者を豊かにするための協同組合なのか、それとも労働者を解放する社会をめざす協同組合なのかという論戦であり、その中心にいたのがホリヨークである。

1891年、ホリヨークは新著においてロッチデール協同製造組合を紹介し、それに続けて14の項目を挙げて「これが“ロッチデール・システム”である」と喝破した⁵⁶。

- (1) 先駆者たちは、主として自分たちで拠出する資本をもって店舗を始めるという範を示した。
- (2) 手に入れることができるもっとも純良な品物を供給している。
- (3) 目方や寸法をたっぷりとしている。
- (4) 安売りをしたり商店主と競ったりせず、市価で売っている。
- (5) 掛け売りをせず、掛け買いもしないことで、労働者の負債を防いでいる。
- (6) 利益はそれを生み出した人たちのあいだで分け合うべきだという認識から、剰余金は組合員に買い物額に比例して払っている。
- (7) 剰余金を店舗の剰余口座に積み立てることを勧めて、組合員に儉約することを説いている。
- (8) 労働や取引（これらのみが資本を生産的なものにする）が利益を受け取る公正な機会を得られるように、利子率を5%に固定している。
- (9) 工場では利益を、それを生み出した労働者に賃金に比例して分配している。
- (10) 組合員の進歩と能力向上のために、総利益の2.5%を教育にあてている。
- (11) すべての任命や提議が全組合員の民主的な投票権（1人1票）に基づいており、既婚女性財産法制定のはるか前から、単身であろうが既婚であろうが自分の積立金を受け取る権利を女性がもっている。
- (12) 犯罪や競争のない産業都市を建設して、協同組合方式の商業と製造業の発展を図ろう

としている。

- (13) 卸売購買組合を創設することで、他では手に入れられないような確実に純良な品物を供給するという自分たちの宣言を実行する手段を編み出した。
- (14) 全勤労者に倫理と能力とを保証する新たな社会生活の始まりとして、店の運動を捉えている。

そして 1893 年、『民衆による自助』を増補して、この 14 条を転載するのである⁵⁷。後の時代、ICA の原則制定委員を務めたボナーは、先駆者たちの原則を 9 つにまとめて紹介している⁵⁸ が、ホリヨークはそこにはない、労働者に対する利潤分配や、小売事業にとどまらずに全産業に協同の輪を広げて新たな社会生活の確立を志すことをも「ロッヂデール・システムの主な特徴」として掲げている。先駆者組合創立から 50 年、1890 年代になってもなお、あるいは半世紀のさまざまな変化を経験したこの時代においてこそ、先駆者たちの取り組みをそのように紹介する彼の思いは明らかであろう。

おわりに

労働のあり方を問いかけ、協同組合運動の本質は何かをたたかわせる論戦は、次の 50 年、国際協同組合同盟（1895 年創立）へと舞台を広げて、未曾有の恐慌と世界大戦の時代へと持ち越される。1944 年の「ロッヂデール 100 年」に向けて、協同組合とその原則についての議論がいかに関心されたのかは、稿を改めて論じなければならないが、本稿で示したように、ロッヂデール公正先駆者組合の最初の 50 年は、時代の進展にうまく適応し、時には大胆な転身をも果たしつつ、自分たちの理想を追求しようと苦闘した先駆者たちとその後継者の 50 年だった。そこから何を教訓として読み取り、その何を継承するのか。そうした問いを今なお投げかけているという意味でも、やはりロッヂデールは協同組合運動の“源”であり“先駆”なのである。

* 本稿は、2021～2022 年度関西大学学術研究員制度による支援を受けた研究成果の一部である。また投稿に際しては、査読者からの有益なコメントを受けて論稿の改善を図ることができた。ここに記して感謝申し上げたい。

- 1 Roger Penn, *Skilled Workers in the Class Structure*, Cambridge: Cambridge University Press, 1984, p. 50. 19 世紀前半、「ロッヂデール・フランネル」として有名だったウールの生産はコットンへと次第に転換する。したがって 1830 年代に活動したロッヂデール友愛協同組合 (Rochdale Friendly Co-operative Society) の組合員のほとんどはフランネル工だったが、1844 年に創設された公正先駆者組合は、より幅広い層から構成されていた。G. T. Whitworth, *'Bobbins' A Short History of the Textile Industry in Rochdale*, Littleborough: George Kelsall, 2009, p. 67.
- 2 公正先駆者組合の議事録によると、1844 年 8 月 11 日に最初の総会を開催した組合は、8 月 15 日の会合で創立日を 8 月 15 日と宣言し、これ以降ほぼ毎週 1 回の頻度で会議を開き、店舗開設の準備を進めている。9 月からは店舗用の建物探しが始まったが作業は難航し、新たに 11 月に担当者を任命、同月 25 日にトード・レーンの建物を 3 年契約で家賃を年 10 ポンドとして借りることが決められた。また、最初の仕入れ品を小麦粉、バター、砂糖、オートミールとすることが 12 月 12 日に、店での金銭の扱いをウィリアム・クーパー (William Cooper) が、商品の販売をサミュエル・アッシュワース (Samuel Ashworth) が担当することが同月 16 日に決められている。

創立から1851年までの公正先駆者組合の会議議事録は Co-operative Union によって1960年代にマイクロフィルム化されて流通した (*Papers Relating to the Rochdale Equitable Pioneers*, Wakefield: Micro Methods) が、キャロル・デイビッドソン (Carol Davidson) がこの時期の議事録の transcription を私家版で公開している (*The Original Rochdale Pioneers*, 2016)。

- 3 ホリヨークは開店直後の状況を「数分のうちにトード・レーンは忍び笑いに包まれた」と描写している。G. J. Holyoake, *Self-help by the People: The History of the Rochdale Pioneers*, 10th ed. London, 1893. (財団法人協同組合経営研究所訳『民衆による自助 ロッチデール先駆者たちの歴史』改訂版、協同組合経営研究所、1993年) 第3章。ただしその記述は、人々に感動を与え、全世界に先駆者の存在を知らしめるという点で非常に優れたものであった反面、歴史的事実の描写という点では、豊富な資料を駆使した叙述であるとはいえ、必ずしも正確ではない点が散見されると指摘されている。1次資料に基づく草創期の公正先駆者組合の研究としては、急逝された故・柿本教授による一連の分析が未だに最も綿密で信頼できる業績であるように思われる。柿本宏樹「イギリス協同組合運動とロッチデール・パイオニアーズ」『商学論究』(関西学院大学) 26、1979年。「初期ロッチデール・パイオニアーズの発展と組合店舗経営」『産研論集』(関西学院大学) 7、1979年。「1850年代のイギリス協同組合運動-ロッチデール・パイオニアーズの卸売事業をめぐって」『産研論集』(関西学院大学) 12、1984年。一方海外では、組織の内部資料のみならず先駆者たち個人の経済的・宗教的背景にまでさかのぼって先駆者組合を理解しようという研究 (Dorothy Greaves and Geoffrey Tweedale, "James Tweedale (1818-1886): Rochdale Pioneer" *Transactions of the Lancashire and Cheshire Antiquarian Society*; 90, 1994. 八木孝昌・田畑理一訳「(資料紹介) ジェイムズ・トウィデイル (1818-1886) ロッチデール先駆者」『経済学雑誌』(大阪市立大学) 104(2), 2003年。John K. Walton, "Revisiting the Rochdale Pioneers", *Labour History Review: the Bulletin of the Society for the Study of Labour History*; 80(3), 2015. Davidson, op. cit. など) が生まれている。
- 4 草創期の文書で組合名は Rochdale Society of Equitable Pioneers とされていたが、その後 Rochdale Equitable Pioneers' Society の名称が文書・広告・設備等で用いられ、定款上もこれが組合名だと明記された。
- 5 *The Co-operators: A History of the Fenwick Weavers*, written by John McFadzean, researched by John Smith, East Ayrshire: East Ayrshire North Communities Federation, 2008. このパンフレットでは、フェンウィック組合による周辺地域の組合誕生 (1777年 Govan, 1799/1800年 Johnstone, 1800年 Kilmarnock, 1812年 Lennoxton, 1815年 Balfour, 1821年 Larkhall) への影響が推測されている。
- 6 英国では協同組合といえば "divi" (利用高に基づく剰余金の割戻し) というイメージが強く、これこそが協同組合の最大の特徴であり存在意義だと一般の人々に受け止められているが、その始原はフェンウィックだとする見解もある。「織物工組合は原材料や織機を購入して分け合うことから始まったが、1769年には食品や"料理"に手を広げている。最初は、オートミールを1袋卸値で購入し、それを少量に分けて安価で販売した。蓄えは組合員の間で分配された。スミス氏は、このやり方が割戻し "divi" の原型であるという。」(Severin Carrell, "Strike Rochdale from the Record Books. The Co-op Began in Scotland" *The Guardian*, 7 Aug 2007.)
- 7 シアネスはケント州北部のシェッピー島 (Isle of Sheppey) にある町。この組合は半世紀近く登記をしていなかったが、島の郷土史家は地元組合の先駆性を誇らしげに語っている。「協同組合という呼称はロッチデールの織物工たちによってつくられたが、その基本的な諸原則は、ロッチデールの組合が創始される30年ほど前に、シアネスの港湾労働者たちによって練り上げられた。」("Sheerness Economical and Industrial Society" <https://sheppeyhistory.uk/z-sheppey/history/coop/index.html>)
- 8 G. D. H. Cole, *A Century of Co-operation*, London, 1944. 中央協同組合学園コール研究会訳『協同組合運動の一世紀』家の光協会、1975年、第2章。
- 9 リボン生産の中心コベントリ (Coventry) でその生産者達によって設立されたロックハースト・レーンの組合は、周辺の組合と合併を重ねて、2000年に現在のイングランド中央生協 (Heart of England Co-operative Society) となっている。Miles Hadfield, "Heart of England Co-op Returns to its Roots - and Looks Back on its Past", *Co-op News*, 28 June 2019.
- 10 ロッチデールとハリファックス (Halifax) の中間に位置するリップondenの組合は2度の大戦を生き延びたが、1960年代に合併をめぐって激しく対立する ("Ripponden Members Turn Down Co-op Merger Plan Despite Directors' Recommendation" "Co-op Members Have Chance to Reconsider Rejection of Merger Scheme" "Despite Advice by Experts - Merger Move Again Rejected by Ripponden Co-op Members, Board's Advice to Join with Sowerby Bridge Not Accepted" *Halifax Evening Courier*; 7 January, 21 January and 3

February 1961)。結局 1964 年に Sowerby Bridge Industrial Society との合併が果たされたが、同組合は 4 年後突然解散してしまう。注 16 を参照。

- 11 「過去数年間、大勢の職工その他の人々が、『協同組合 (Co-Operative Society)』という名称の下で、自分たち自身と公共の利益のために、食品や日用品を販売するための組合を組織してきた。」(“Co-operative Societies. A Smash”, *Halifax Guardian and Huddersfield and Bradford Advertiser*; 24 June 1843)
- 12 協同組合運動の普及を地理学的に考察した M. Purvis, “Co-operative Retailing in England, 1835-1850: Developments beyond Rochdale” *Northern History – A Review of the History of the North of England*, 22, 1986. は、ランカシャーやヨークシャーのウェストライディング (West Riding) 地方では他の地域とは違って 1830 年代から 40 年代の協同組合が後の運動に大きな影響を与えたと指摘している。「ロッチデールの組合が創設された前後の時代、協同組合の活動は一般に認められているよりもっと多様であり、もっと活発なものだった。」(p. 215)
- 13 生協店舗の写真を多数掲載する Lynn Pearson, *England's Co-operative Movement: An Architectural History*, Swindon: Historic England, 2020 は、コミュニティにおける生協の存在を視覚的に実感させる書物である。
- 14 組合員に無料で一定期間図書を出すなど、かつては地域の協同組合が今日の公共図書館が果たす役割を担っていたが、当時の協同組合図書館の蔵書目録 (*Catalogue of the Library of the Rochdale Equitable Pioneers' Society Limited*, Rochdale, 1868. *Catalogue of the Library of the Oldham Equitable Co-operative Society Limited*, Manchester, 1870. *Catalogue of the Library of the Bacup Co-operative Store Limited*. Part II, Manchester, 1926) は、まさにそれらが質量ともに公共図書館といってもいいものであったことを示している。ロッチデールの教育重視の原則は、経済の発展に比して公教育が著しく遅れていた英国において、とりわけ大きな役割を果たしてきた。Peter Gurney, *Co-operative Culture and the Politics of Consumption in England, 1870-1930*, Manchester: Manchester University Press, 1996 は、協同組合がコミュニティで担ったこうした機能に着目し、「コミュニティ建設から店舗経営へ」という S・ポラードの有名な定式化 (Sidney Pollard, “Nineteenth-Century Co-Operation: From Community Building to Shopkeeping”, A. Briggs and J. Saville eds. *Essays in Labour History*, London: Macmillan, 1960) では見落とされ、無視されたものが多いと批判して、大量消費の資本主義文化に対抗する地域の消費者による「協同組合文化」の展開を描く研究書である。これ以後、こうした視点を含んだ研究が内外で重ねられている。
- 15 ロッチデール公正先駆者組合は 1857 年に隣接するキャッスルトン (Castleton) の組合と最初の合併を経験しているが、20 世紀になると近隣のスモールブリッジ (Smallbridge) やミルンロー (Milnrow) の組合との合併を皮切りに、次々に統合を重ねることとなる。懸案であった同じロッチデールの街における競合生協 (Rochdale Provident Co-op) との再統合も 1933 年に果たし、先駆者 (Pioneer) の名を冠して周辺組合を吸収した生協は、1991 年、伝統あるその名を捨てて United と称することとなるが、それはこの生協の軌跡をよくあらわしている。こうしてイングランド協同組合運動の中心であるランカシャーとヨークシャーの大半の組合が統合され、ついに 2007 年には、このユナイテッド生協と Co-operative Group (旧 CWS) とが大統合することで、全国的大生協が誕生する。Takashi Sugimoto, “Red Store, Yellow Store, Blue Store and Green Store: The Rochdale Pioneers and their Rivals in the Late Nineteenth Century” 『協同組合研究』27 巻 1 号、2008 年。杉本貴志「ステーキホルダー・レポートから見るイギリス協同組合運動の現在 - ユナイテッド・コープを中心に」『協同組合経営研究誌 にじ』616 号、2007 年。同「イギリス生協と連合組織 - CWS = コーペラティブ・グループの組織・事業・統治」『協同組合経営研究誌 にじ』621 号、2008 年。
- 16 ロッチデールに 10 年以上先立って創設されたリップondenの組合については、その経験が公正先駆者組合に何らかの影響を与えた可能性を認めつつも、実際の活動においては協同組合というよりも業者的な存在になっていたことが指摘されている。「現実にはリップonden協同組合がめざしていたのは狭く限られたことであって、一部の取引は外部の一般の人々とのもので、そこから得られた利益で資本を拡大していたから、まもなく彼らは他を寄せつけない独占的な商人といってもいいような存在となってしまった。真に社会的だった原則が、現実には資本家的な事業に退化し、そのめざすところは、コミュニティを立ち上げ、労働と労働とを交換するというところからはるかに遠ざかってしまったのである。」(John H Butler, “The Origins and Development of the Retail Co-operative Movement in Yorkshire during the Nineteenth Century”. PhD thesis, University of York, 1986, p. 78)
- 17 公正先駆者組合の組合員数は、1845 年 74 人、1850 年 600 人、1855 年 1400 人、事業高はそれぞれ 710 ポンド、

- 1万3180ポンド、4万4903ポンドと推移している (Holyoake, *op. cit.* 第7章)。1848年に140名であった組合員が2年後には600名へと一気に増えているが、その背景として、1849年のロッチデール貯蓄銀行 (Rochdale Saving Bank) の破綻が結果的に公正先駆者組合への出資=加入者の増加を導き、草創期の安定的発展を基礎づけたことが指摘されている (Arnold Bonner, *British Co-operation: The History, Principles, and Organisation of the British Co-operative Movement*, revised edition, Manchester: Co-operative Union, 1970, pp. 50-51.)。組合が掲げる理念とは別に、現実にはロッチデールの住民の中に、安心・安全な買い物先としてだけでなく、虎の子の蓄えの安全な預け先としての公正先駆者組合への期待も、確かに存在したのである。
- 18 1845年創立のクルー (G. D. Lucas, *History of the Crewe Co-operative Friendly Society Ltd. (Established 1845)*, Manchester, 1929) や1847年創立のリーズ (George Jacob Holyoake, *Jubilee History of the Leeds Industrial Co-operative Society Limited, from 1847 to 1897, Traced Year by Year*, Manchester, 1897) の創設に関する記述には、ロッチデール公正先駆者組合についての言及が見られない。基金を積み立てて雇用の場を確保しようという Redemption Society (救済組合) の運動から派生して生まれたリーズの組合店舗は赤字が続いて短期間で閉鎖されてしまうが、そこで代表者がロッチデールを訪問して経営法を学んだのは1858年のことだという (*op. cit.*, pp. 64-66)。ただし、のちのブリッジ・エンド協同組合 (Bridge End Co-operative Society) の母体となったトッドモーデン (Todmorden) の組合誕生 (1847年) については、「この時点で結成から3年ほど経っていたから、彼らがロッチデールの先駆者たちの成功を聞いていたことは疑いない。そのなかには、織物工たちが彼の町でどのように事業を営んでいるのか、自分の目で見てみよう」とロッチデールを訪れた人もいただろう。」という記述がある (Fred Pickles, *Jubilee History of the Bridge End Co-operative Society Limited. From 1847 to 1901*, Manchester, 1902, pp. 2-3)。もしこの推測が正しければ、今日も建物がその面影を残すこの組合が、公正先駆者組合の影響下で設立されたもっとも古い例のひとつということになろう【図5】。
- 19 2つの組合 (オルダム産業協同組合とオルダム公正協同組合) は、それぞれの創立をこう振り返っている。「ロッチデールというお手本が、彼らにとって道標だった。」 (J. T. Taylor, *Jubilee History of the Oldham Industrial Co-operative Society Limited*, Manchester, 1900, p. 18) 「ロッチデールにおいて、1844年以来人々が行っており、いまでも続けていることを、ここオルダムでも行うことが出来るだろう。」 (Chas. Walters, *History of the Oldham Equitable Co-operative Society Limited, from 1850 to 1900*, Manchester, 1900, p. 20)
- 20 1850年1月31日役員会および8月13日特別総会議事録。
- 21 1850年1月7日冬季会議議事録。
- 22 Johnston Birchall, *Co-op: the People's Business*, Manchester: Manchester University Press, 1994 (中川雄一郎・杉本貴志訳『コープ：ピープルス・ビジネス』大月書店、1997年) 第5章。
- 23 “Co-operation”, *Northern Star and Leeds General Advertiser*, 21 April 1849.
- 24 “The Sheffield Equitable Co-operative Society”, *Christian Socialist: A Journal of Association*, 2(44), 1851, p. 133. なお当時の新聞記事では、この組合の名称はシェフィールド公正先駆者協同組合 (Sheffield Co-operative Society of Equitable Pioneers または Sheffield Equitable Pioneers Co-operative Association) とされており (*Sheffield and Rotherham Independent*, 12 April 1851. *Star of Freedom*, 8 May 1852)、名称上もロッチデールの影響は明白である。
- 25 1850年11月28日役員会議事録。公正先駆者組合の準拠法であった友愛組合法は組合員との取引のみを認めており、他組織に卸売りをする場合、個人として組合員となった人間に販売するという形をとるしかなかった。地域の小規模協同組合にとって立ち上げと存続の鍵となる卸売事業については、Holyoake, *Self-help by the People*, 第20章、Cole, *op. cit.* 第8章、前掲柿本「1850年代のイギリス協同組合運動」。
- 26 Cole, *op. cit.* 第5章。
- 27 “The Conference of Co-operative Societies in Lancashire”, *Daily News*, 21 April 1851. ランカシャーと周辺地域の協同組合は、協同組合店舗のほか、労働者協同組的な共同作業所など多様な協同組合が集まって交流し、情報を交換する場を設けていた。1851年4月18日には44組織を代表する80人以上が集まっている。協同の卸売システム構築の下地には、こうした地域における連携があった。
- 28 J. M. Ludlow, “Notes of a Co-operative Tour through Lancashire and Yorkshire” *Christian Socialists: A Journal of Association*, 2(48) - (59), 1851. このなかでは、ロッチデールの公正先駆者組合はあまりにも有名であるから長々とは語らないとされており (p. 259)、当時すでにロッチデールが北部イングランドの協同組合の中で別格の存在であったことがうかがえる。

- 29 協同組合の準拠法としての友愛組合法と「産業および節約組合法」については、中川雄一郎『『産業および節約組合法』の成立と産業パートナーシップ』『協同の発見』134号、2003年。松浦陽子「イギリスにおける初期の協同組合経営 - 1852年産業節約組合法の成立前を中心に」『政治経済学研究論集』(明治大学大学院)10、2022年。
- 30 Edward Vansittart Neale, *The Co-operator's Hand-book, Containing the Laws Relating to a Company of Limited Liability. With Model Articles of Association, Suitable for Co-operative Purposes*. London, [1860], p. 1. 南海泡沫事件以来、無限責任がきびしく求められていたイングランドやウェールズで初めて出資者の有限責任を認めたのが1855年の有限責任法(Limited Liability Act)である。なおスコットランドでは慣習法で有限責任が長く認められており、同地でイングランドに匹敵あるいは凌駕するほど多数の組合が19世紀初めから設立されていたことの要因のひとつは、ここにもあると思われる。
- 31 G. J. Holyoake, "History of the Rochdale Co-operative Pioneers", *Daily News*, 6 July 1857.
- 32 William Cooper, "Position of Co-operation in England", *Daily News*, 15 December 1863.
- 33 この部分はその後の版で削除されたため邦訳版(あとがきには第3版を底本としたとあるが、おそらく第10版第3刷の翻訳である)にもこの記述はない。
- 34 A. M. Carr-Saunders, P. Sargant Florence and Robert Peers, *Consumers' Co-operation in Great Britain: An Examination of the British Co-operative Movement*, 3rd. ed. London, 1940, p. 32. この表では1832年創設のリッポンデンやロックハースト・レーンの組合が含まれていないように思われるが、集計上の見落としや登記上の創立年と実際の設立年との違い等の問題があると推測される。
- 35 今井義夫「ニコライ・バーリンと国際協同組合運動 - ウクライナとイギリスのアルヒーフ資料をもとに」『ロシア史研究』56、1995年。同「ハリコフの最初の消費組合(1866 - 71年)とニコライ・パールリン - 南ロシア(ウクライナ)の初期協同組合運動史から」『一橋論叢』89、1983年。
- 36 元会津藩士野口富蔵と元土佐藩士松井周助が日本人としておそらく初めて先駆者組合を訪れたのは1872年(それ以前に日本人のサーカスがロッヂデールを訪れたという記録がある)、佐賀の出身で日本の生協生みの親ともいえる馬場武義が訪れたのはおそらく1874年頃であり、共立商社、同益社、大阪共立商店の設立は馬場の「協力商店創立ノ議」が『郵便報知新聞』に連載された翌年1879年である。"Members of the Japanese Embassy in Rochdale", *Rochdale Observer*, 19 October 1872. 松崎文夫『ロッヂデール公正先駆者組合を訪れた日本人』全国農協中央会協同組合図書資料センター、1990年。杉本貴志「明治初期における生活協同組合の紹介と研究 - 経済学書に見る協同組合論」『第2回「生活協同組合研究奨励助成」研究報告論文集』生協総合研究所、1994年。野原一仁『近代協同組合成立の研究：日本における「ロッヂデール」共立商社運動の軌跡』野原一仁遺稿追悼出版協賛会、2012年。
- 37 それ故、当時の高名な経済学者は挙って協同組合を著書で詳しく論じていた。杉本貴志「経済学者と協同組合 - イギリス、アメリカ、そして日本」白石正彦監修『新原則時代の協同組合 - 持続的改革に向けて』家の光協会、1996年。
- 38 Cole, *op. cit.* 第1章。
- 39 注17を参照。
- 40 「ロッヂデールの組合の周辺では、その例に倣って、おびただしい数の店が生まれた。しかし同等の能力で運営されたものではなく、その成果は10分の1に満たないものだった。これは原則が悪いのではなく、それを実行する側の問題である。彼らには、分別や団結や忍耐や進取の精神が欠けていた」(Holyoake, *Self-help by the People*, 第10章)。しかしそれは、極貧層というよりもむしろ労働者のなかでは比較的余裕のある人が多く公正先駆者組合に集まったということをも意味している。
- 41 *Laws and Objects of the Rochdale Society of Equitable Pioneers*, Rochdale, 1844. この文書はさまざまな機会に転載・復刻あるいは翻訳されているが、国内で刊行されたものでは『ロッヂデール公正先駆者組合創立150周年記念関係資料集』全国農協中央会協同組合図書資料センター、1994年、などがある。
- 42 公正先駆者組合の議事録は、員外利用や卸売事業の当否といった協同組合としての重要問題だけでなく、細かな備品の購入、日当の支給、会議欠席者への罰金、施設内での禁煙等々、あらゆることが諸会議で議論されて決められていたことを伝えている。
- 43 伊東勇夫編著『協同組合思想の形成と展開』八潮社、1992年、第1章。
- 44 1844年10月27日および10月31日の議事録。

- 45 創立直後の議事録は、協同体建設をめざした初期協同組合のように組合員数を制限すべきか否か、なかなか結論に達せず、議論が続いたことを伝えている。
- 46 *Laws for the Government of the Rochdale Society of Equitable Pioneers*, Rochdale, 1855.
- 47 W. Henry Brown, *Hepworth's Hundred Years of Co-operative Adventure*, Hepworth: Hepworth Industrial Society, [1947], p. 35.
- 48 ハワースが夜中にこれを思いつき、喜びの余り当夜に急いで会議を召集するというのが、先駆者 100 年記念映画 *Men of Rochdale* の名シーンのひとつである。
- 49 "Origin of Dividend on Purchase at Meltham Mills" *Co-operative News*, 7 Oct 1871.
- 50 W. Henry Brown, *The Rochdale Pioneers: A Century of Co-operation*, Manchester, 1944, p. 22
- 51 Cole, *op. cit.* 第 4 章。
- 52 Paul Hibberd, "Rochdale Tradition in Co-operative History Is It Justified?" *Annals of Public & Co-operative Economy*, 39, 1968, p. 538.
- 53 米国議会図書館には、多数の組合員を含むロッチデール市民が署名したリンカーン宛奴隷解放の嘆願書が保存されている。
- 54 "Mr. Hughes, M. P., and the Rochdale 'Pioneers'" *Daily News*, 30 September 1867. "Equitable Pioneers' Society. Opening of the New Central Stores" *Rochdale Observer*, 5 October 1867.
- 55 杉本貴志「ロッチデール公正先駆者組合とその“分裂” - 『非営利・協同』の源流についての一考察」『いのちとくらし研究所報』17、2006 年。
- 56 George Jacob Holyoake, *Co-operative Movement Today*, London, 1891, pp. 92-94.
- 57 伊東前掲書や『新版協同組合事典』(家の光協会、1986 年)は、この 14 の原則をホリヨークが 1857 年にまとめて『デイリー・ニュース』で紹介し、それを『民衆による自助』に収めたとしているが、それは誤解である。1892 年以前の版には、この 14 原則についての記述はない。
- 58 Bonner, *op. cit.* pp. 48-49.